

「保護者とどう関わっていくか？」

江藤 健（中村中学校・高等学校）

1. はじめに

保護者との関わり方が年々難しくなっている昨今、その関わりを避ける教員、いい関係が築けず悩んでいる教員、トラブルとなってしまう教員など、なかなか良好な関係が構築できない教員が多くなっている。精神疾患により、休職を余儀なくされた教員がここ 17 年間増え続けていることからわかる通り、保護者とどう関わっていくのかが、近年の大きな課題となっている。では、保護者とどういった関わり方をしていくことがよいのか。もちろん、100 点満点の方法など存在しないことは言うまでもないが、今回は本校、または私が所属している学年が実践したその方法をいくつか紹介し、参考になるものが 1 つでもあればと思っている。

2. 保護者の変化

最近、保護者の様子に変化が見られるようになったと感じる。自分が年をとったとか、保護者と同じ世代になったとか、自分の状況が変わったことも要因の 1 つと思われるが、明らかに変わってきているように私には感じる。

では、どのように変わってきているのかというと、まずは保護者の低年齢化である。具体的には、子育てに自信が持てない保護者が増えているように思う。そもそも、自信を持った子育てって何だという気はするが、その不安を担任や学年教員にぶつける保護者が増えている。担任宅に夜 10 時や 11 時に電話がかかってくることも珍しいことではない。或いは、私立に入学させたら、あとは勉強もしつけも学校に任せてきってしまう保護者もいる。ちょっと話がそれるが、これには注意が必要で、放任傾向の強い家庭の生徒は、成績不振だったり不登校だったり、よくない兆候が出てくることがある。さて話を戻すが、放任な保護者に対して、過保護な保護者も多い。「うちの娘は、友だちを作るのが苦手だから、お昼休みに独りぼっちになっていないか先生が教室にちょこちょこ見に行って欲しい」とか、「〇〇ちゃんうちの娘がケンカして合わないから、（年度途中にも関わらず）今すぐクラス替えをして欲しい」、「うちの娘が、朝時間通りに登校できなくなってるのは学校のせいだ、朝迎えに来い」といった、いわば理不尽な要求をしてくる子離れできていない保護者が少なくない。また、自分の娘からの話を 100% 鵜呑みして、「うちの娘にかぎってそんなはずがない。（明らかに色が変わっている髪の毛を見て、）これは地毛だ」と言い張ってみたり、「（実際は、生徒同士お互いの気持ちのすれ違いなのに）うちの娘が一方的にいじめられている。いじめている奴らを退学にしろ」と、これまた理不尽な要求を試みたりと、親という立ち位置を忘れ、完全に娘と同じ視点に立ってしまっている保護者が増えているのは確かだ。

また、保護者の意識そのものにも変化が出始めている。私立学校に対しては、近年特に、費用対効果を求めてくるようになった。「高い学費を払っているんだから」という枕言葉

がつく要求が増えている。例えば、「高い学費を払っているんだから、もっと補習をしてくれ」、「高い学費を払っているんだから、それくらいしてくれ」、この場合の「それくらい」とは、推薦の基準に届くよう、評定を上げてくれというものである。それ以外にも、「もっと偏差値を上げてくれ」、「〇〇大学に合格させてくれ」といった要望の域を超した要求が絶えない。いわば私立学校の予備校化である。

次に、これについては賛否の分かれるところであろうが、学校は教科指導とは別に、家庭ではなかなか教えきれない集団生活の中での過ごし方、人との関わり方などを教え論していく場と考えている。だが、人としての行動や考え方で学校で教えてくれという保護者が増加傾向にある。具体的には、お金の使い方、その貸し借りがトラブルの原因となりやすいこと、或いは挨拶やお礼といった私からすれば基本的なことすら、家庭では教えられていない。そして、それを学校に求めてくる。

さらに、保護者に限ったことではないのだが、マニュアル化した保護者が増えている。あくまでも推論の域を超えないが、保護者の世代は、雑誌世代である。若いころ雑誌から流行の服、人気のデートスポット、美味しい料理店など、均一化された情報を受け取っており、それに言わば慣れてしまっている。ましてや、現在は雑誌に限らず、ネットでそういった情報を得やすく、そういった情報から「こうあるべき」というイメージを自分の中で形成しやすく、それを子育てにも当てはめているように見える。そのあるべき「型」にはまらない子ども（本来、それが自然なのだが）は、マニュアルとは違う子どもというレッテルを貼られ、そうされてしまった子どもたちにたいへん不安を覚える。

いずれも、首を傾げたくなるところが間々あるが、共通していることは「子を思っていること」ということである。親としては、ある意味、当然の言動といえる訳で、今はそういった保護者とうまく向き合っていかなければならない。

3. c l o s e の関係から o p e n の関係へ

基本的なスタンスとして、保護者に対して学校側が背中を見せて、何をしているのかわからないという状態にするよりも、保護者と正対して何をしているのか、何を考えているのかわかってもらうことが大切であると考えている。そういった中で、保護者を学校行事に巻き込むイベントを、過去いろいろと企画し、実践した。ここでは、その企画の実践報告をしてみたい。

ちょうど他学年が、校外授業等で学校を留守にしているとき、私が所属する学年（当時は中学2年）では、学年ドッチボール大会を企画し、実施した。本校は給食ではないので、その日の昼食準備を保護者に依頼し、調理室でカレーライスと豚汁を作ってもらった。お米は生徒に1人2合ずつ持参させ、具材は事前に保



護者の方に調達を依頼した。また、お総菜屋さんを営んでいる保護者の方もいらしたので、コロッケを差し入れしてもらったりした。これには、生徒数の2割にあたる保護者の方が昼食準備に協力してくださり、生徒130名、学年教員6名、その他学校に残っていた教職員10名強、手伝ってくれた保護者30名弱、合計約180名分のカレーと豚汁を何とも手際よく



作っていただき、残った時間で生徒のドッジボール大会を観戦したり、生徒vs保護者のエキシビジョンマッチを行ったりと充実した大会となった。保護者の方々も、「子どもたちの学校での活動に関われた」という、自負というか達成感があったようである。こういった関わりは、部活動の校内合宿などでも食事準備の協力として行われている。

そのドッジボール大会を行った学年が中学1年の時には、親睦を深めるべく親子ボウリング大会を学年で実施し、生徒・保護者共に80%を超える高い出席率の中で行われた。当日は、近くのボウリング場を全レーン貸し切り、生徒と生徒、生徒と教員、保護者と保護者、保護者と教員、生徒と保護者といういろいろな形の親睦が図られた。スコア・勝敗よりも、みんなでワイワイ楽しくできたことが印象に残っている。この時も、受付やボウリング後の懇親会進行などは、保護者の方をお願いし、上手に協力体制を築くことができた。



さて本校には、「なかむらおやじの会」というものが存在する。もともとは、あるクラスで細々と始まったおやじの会が学年単位に広がり、現在ではそれが学校単位にまで拡大して、現在200を超えるおやじが参加している。清澄祭（文化祭）の時には校内見回りや、後片付け、ゴミ仕分けの手伝いなどをお願いしている。また、普段なかなか清掃できない箇所や、力のいるところはおやじの方々にきれいにしてもらったりしている。東日本大震災のあとは、校友会（生徒会）とおやじの会とがコラボして、大人目線、企業目線から東日本大震災を考える、特別講演会を実施した。また、ソフトボール部と親善試合を行ったり、校庭を使ってバーベキュー大会を開催したり、おやじの会設立





10周年記念の時には近くの相撲部屋から杵と臼を拝借して、餅つき大会を実施したりと、精力的に活動している。女子校だからこそ、こういった形でおやじが学校に関わるということは良いことだと思う。おやじの会に参加されているおやじたちが、口々に揃えて言うことは、「娘と会話が増えた」である。娘と距離が生まれやすいこの時期に会話の種が、しかも学校のイベントを通じて

生まれるというのはよいことだ。

続いて入学試験でのお手伝いを紹介する。もちろん、入試に関わる実務をお願いする訳にはいかないのですが、受験生を待つ保護者にお茶を出したり、学校生活に関する質問を受けたりするお手伝いをお願いしている。また、学校説明会（すべての回ではないが、特定の回において）では、本校の保護者と、受験生の保護者との懇談を実施している。保護者だからこそ聞ける生の声とあって、受験生の保護者から好評を頂いている。本校の保護者も今だから言えること、1年前はこう



だった、入ってみてわかったことなど、本音の部分の話することができるようである。もちろん、いずれも希望制であるが、毎年多くの保護者の方に協力いただいている。

こうして、学校行事に積極的に関わってもらうことで、学校の様子が否が応でも見えてくる。当然、娘の様子も娘から直接聞く話だけでなく、客観的に見えてくる。当然、子どもと関わる機会、話題も増えてくる。さらに、保護者同士のつながりも強まり、他の家庭の様子や、友達の様子も伝わってくる部分がある。そうすると、自分と同じことで悩んでいることがわかったり、自分の娘だけが反抗期を迎えている訳ではないということがわかったりしてくる。そして、それを共有することでさらに保護者同士の絆が強まっていく。一方、教員との接点が増えれば、その人柄が見えてくる。場合によっては、教員が生徒に話した内容の真意をくみ取ることさえ可能となってくる。このように、学校に関わってもらえばもらうほど、見えない部分が浮き出るようにして見えてくる。そして、様子が見えてくれば安心できる部分も増える。つまり、保護者から何かを言われたいよう、クレームをつけられないよう、closeの関係を作るのではなく、逆に学校にどんどん来校してもらって、学校の様子を見てもらう、場合によっては協力してもらうというopenの関

係を構築していくことが望ましいと考える。

4. 保護者会の工夫

保護者会も工夫次第で、保護者との関係に変化を生じさせることができる。保護者会は緊張する、何を言われるかわからないなど、保護者会に対してあまり好印象を持っていない教員も少なくない。そんな、後手に回りやすい保護者会でどんなことを仕掛けていけばよいのか。

中学1年の4月最初の保護者会で伝えることがある。それは、「学校への不満は、生徒の前で言わないで欲しい。何かあれば直接連絡を下さい。」ということである。私たち教員は、生徒のために誠心誠意努力するが、完璧ではない。なので、保護者が「何で？」と思うところが少なからず出てくる。ところが、保護者会でできもしないアドバルーンを上げたり、背伸びをするのは結果的に自分の首を絞めることになりかねない。等身大でぶつかっていった方がいい。そこで、学校への不満を子どもの前で言わせてしまっただけでは、教員と生徒との信頼関係は築きにくく、生徒の成長にも少なからず影響しかねない。だから、何かあったら直接言って欲しいと伝えるのである。でも、こう伝えることで、ちょっとしたことで確実に連絡が来るようになる。だが、こちらの意図やそうなった背景などを伝えると、納得される保護者の方は多く、あとに引きずらないでもらえているように感じる。子ども伝いに聞いた不確かな情報で、子どもの前であれやこれやと言われるくらいなら、直接話した方がこちらの真意も、保護者の真意も伝わる。

6月に行われる2回目の保護者会ではクラス会実施のあと、そのまま教室で茶話会を開く。茶話会では、生徒用の名札を使って、グループエンカウンターのような形で保護者同士のつながりを作っていく。具体的には、半ば強制的に保護者同士でメールアドレスを交換させて横の関係を築いていく。「まだ交換できていない方いますかーっ？」なんて声をかけて、交換しやすい環境をこちらは作る。こうして、保護者同士が点から線の関係になってくると、ちょっとした疑問や生徒同士のトラブルが仮に起こっても、学校が介入せずとも保護者同士で解決してくれることがある。さらに、その茶話会のあとは、場所を変えて懇親会を開いている。これには学年教員が原則全員参加し、保護者同士はもちろんのこと、教員と保護者との信頼関係も構築していく。この懇親会は、保護者会のたびに実施し、おおよそ6~7割程度の保護者が参加している。

さらに、保護者会では実力テストなどの全体データを提示し、現状をきちんと報告して、保護者と情報を共有する。或いは、学校行事での様子をスライドショーを使って説明する。こうして可視化することで保護者の安心を得ている。本校では、各学年で1回、保護者対象のキャリアガイダンスを実施している。ここでは、年々変化する進路情報を提供し、保護者の方にも受験や進学をできるだけ意識してもらうようにしている。

5. 保護者への情報発信

学年だより・学級通信といった紙媒体による情報発信は、多くの学校で行っていること

と思われるが、今回は私が所属している学年で行っているメールマガジンについて紹介したい。

本校では、緊急連絡用に全保護者の方にメール登録してもらっているのだが、実は、これを緊急時以外に活用している。具体的には、毎週金曜日にメールマガジンを発信している。この1週間で配布したものと来週の予定に加えて、この1週間の学校や学年の様子を情報として発信している。「これは非常に助かる」という声を多く頂いている。「先生のちょっとしたつぶやきが楽しみです」なんて言ってくれる保護者もいる。生徒たちはいやがっている部分があるが、何が配られ、どんなことがあったのか学校から確実に伝わるため、大切な配布物を渡しそびれるということがなくなるし、子どもとの話のきっかけにもなる。効果は大きい。本校でも、もちろん学年だよりを適宜発行しているが、これは変な話、生徒が保護者に渡さなければ、保護者は目にすることはない。でも、メールマガジンで「今週、学年だより配布しましたよ」ということが直接保護者に伝われば、紙媒体の学年だよりもきちんと手元に届く。このシステムは、3月11日の東日本大震災の時にも大きく活躍した。

以下、実際に保護者に宛てたメールを一部紹介する。

こんにちは♪

日本勝ちましたね㇏(@^▽^@)ノ

朝3時に起きて応援した甲斐がありました(笑)

ところで、木曜日に中間考査の個人結果を生徒に渡しました。ご覧になりましたか？それを受けて、「学習記録ノート」に保護者の方にコメントをいただくこととなっています。

来週の月曜が提出日ですので、この週末にご記入ください。

さて、来週はいよいよ研修合宿です。今週末にその準備を進めておいてください。

有意義な研修合宿となるよう、我々も準備万端で進めています。

気をつけて行ってまいります。ワクワク♪o(^o^o)(o^o^o)oワクワク♪

【今週の配布物】

「第1学年研修合宿要項」「じゅげむじゅげむ第6号」「各クラス保護者面談希望表」「個人成績表」「振替授業のお知らせ」

【来週の予定】

6/26(土)数検、6/30(水)～7/2(金)研修合宿、6/26・7/3共に土曜講座はありません。

学年主任 江藤 健

<保護者宛メールマガジン(2010年6月第4週分)>

全員無事です。交通機関がストップしている状態なので、電車が動くまで学校で待機させます。但し、徒歩で帰れる生徒については、ただ今より下校させます。現在、携帯電話は返却しており繋がる状態なので、連絡を取り合って各ご家庭で帰宅方法を確認してください。

学年主任 江藤 健

<2011年3月11日の緊急発信 その1>

〇〇さま

こんばんは。

今、学校にいます。

電車が止まっているので、学校に泊まります。

いいですか？

と、本人が言っています。

返信ください。

江藤

<2011年3月11日 その2>

6. (学生に向けて) 保護者との関わり方—基本編—

まず、大原則として生徒との信頼関係を構築し、生徒の学校生活への満足度を高くすれば、保護者との信頼関係は自ずと築かれていく。だが、教員としてやってはならないことがある。致命的なものになりかねないミスをここに紹介しておく。

はじめに、清潔感のない身だしなみはよくない。もちろん本校は女子校なので、ニオイなど生徒は敏感である。次に、授業がつまらない教員は、生徒との信頼関係を構築できない。これは言うまでもないことだが、教壇に立って勝負ができない教員は、正直何をしてもしも苦しい。また、約束を守らない教員は信頼関係を得られない。しかも、軽々に口約束して、それを守らない教員はおのずと生徒や保護者から距離を置かれてしまう。ただ、約束してもその対応が遅かったり、機を逸してしまっている教員も同様である。それ以外にも、誠意がない、融通が利かないというのも論外だし、20代・30代の教員が上から目線で保護者に対してものを言うようなことも(状況によるが)、保護者との正しい関係が築けないことが多い。あとは「ごめんなさい」が言えない教員も、遅かれ早かれ関係をこじらせていく。そもそも、ここに挙げたような教員は、教員である前に人としてどうなのかという部分が多いが、まずはこういったことを気をつけたい。

そして保護者と正しく関わるにあたって、一番大切と思われることが、生徒を第一に考

えてどう動くかということである。具体的には、子どもの成長に、何が必要かを常に意識することである。ただし、これは模範解答や正解がある訳ではない。ポリシーを持って進んでいくことが大切である。そして、ぶれない芯があるとより強い。また、生徒の満足度を上げる工夫もしたい。もちろん、これは生徒に迎合したり、おもしろおかしく過ごせれば何でもいいというものではない。生徒の満足度が上がれば、原則何事も上手くいく。

さらに、モンスターペアレンツ（MP）ありきの先回り・マニュアル化は本質から乖離しているということを意識すべきである。「転ばぬ先の杖」のような先回り対応は本末転倒であり、そういった考え方は、最終的には生徒とも保護者とも信頼関係を築くことができない。やはり、生徒本意というスタンスは維持したい。

そうなってくると、生徒といかに信頼関係を築くことができるかということとなる訳だが、そのためには、誠意ある対応が不可欠である。その1つは、スピーディーな対応である。先ほども触れたが、機を逸した対応に次はない。また、私も失敗したことがあるが、軽はずみな言動、口約束は厳禁である。「大丈夫だと思います」という、責任の所在を濁すような約束は望ましくない。また、特に女子校では平等な対応が求められる。これは生徒の一番嫌うところでもあり、特定の生徒にだけ「ちゃん」付けしたり、授業中当てる回数極端に多かったりするというのは公平性を欠き、生徒との関係構築に支障を来す場合がある。それから、生徒を第一に考えるといったが、「生徒第一」と「校則・ルール」のバランスをとった柔軟な対応が必要である。生徒第一の観点から、いけないこと、できないことをOKとしてしまっただけではいけないし、「校則・ルール」を印籠のように使い、すべて原則論で片付けてはいけない。最後に、「できること」と「できないこと」をきちんと説明することも肝要である。

7. 今後の可能性として

保護者の要求が多様化しているからこそ、保護者との関係をより強化する必要があると考える。また、近年では実施している学校も多いが、保護者による学校評価アンケートを導入せざるを得なくなってくるのではないと思われる。

実は、私立の中高一貫校の場合、中学に入学＝親も入学という傾向がある。そうすると、中学から高校へ進むにあたって、保護者をどう子連れさせていくかというのが今後のテーマとなってくるように思う。

そしてもう一度、「子育て」と「学校教育」とは、根本が違うものであり、どう役割分担するか、アプローチを変えながらもどう目線を合わせるのか、といった共有が必要になってくるのではないだろうか。

8. 感想（一部抜粋）

○ 現場での実体験を土台にした話ですので、公立中の自分の状況とは違うケースもありましたが、「これから教員を目指す学生」にとっては、大変役に立つ内容であったと思います。（一般・男性）

- 保護者との信頼関係を築いていくことが大切だと思った。今の保護者は何かするとすぐに学校に文句を言いにくるという印象があったが、それは一部の人で教員の対応で保護者ともよい関係がつけるとわかった。（法学部1年）
- 学生の自分としては、生徒・児童・学生の立場から見る学校の現状や教員と保護者の関係しか知らない。なので、「学校・教員側からの視点」で話が展開されていた本分科会はとても新鮮だった。（文学部1年）
- 公立と私立の差を少し考えさせられました。保護者からの信頼は生徒からの信頼から生まれるのだと思いました。（法学部1年）
- 国立中学出身ですが、学校からの干渉は全くありません。その方が子どもも保護者も頭を使って進んでいこうとしています。日本の未来のためには、いつかそうした方がいいのではないのでしょうか。（政治経済学部1年）
- よくモンスターペアレントとかいう言葉を最近頻繁に耳にするので、保護者とどう関わっていくのかというテーマはとても興味深かったです。保護者を巻きこむことで保護者に安心感を与えるというのはなるほどなと思いました。（文学部1年）

9. 結びにかえて

最後に、今回このようなテーマ設定をしたのは、他でもなく学校のあり方、生徒との接し方、保護者との関わり方に、今変化が生じてきていると感じているからである。本校で行われていることが100%正しい訳でもないし、本校のやり方がどの学校にも当てはまると思ってはいない。もっと違うアプローチをしている学校もあるだろうし、何もしてなくても良好な関係を築けている学校だってあるはずである。だが、こういったテーマについて考えたり、議論をしたりと、今後はもっと意識していかなければならないのは間違いない。今回の発表がそのきっかけだったり、何かのヒントになってくれれば幸甚である。